念仏為本

ノート

2023/03/08　論題を味わう勉強会　名古屋別院　山上正尊案

（おつとめ）　三選文　1

（過去の提要判決）　昭和36年度　念仏為本　判決　2

（過去の判決）　平成18年度　念仏為本　判決　2

（過去の判決）　平成28年度　念仏為本　判決　5

（今年の提要）2023(令和5)年度　提要　8

会読案　題意　出拠

釈名

念仏　10

サンスクリット　10

字義（諸橋大漢和辞典）　10

為　11

本　11

合釈　12

義相

（参考）無量寿経の念仏　12

無量寿経　12

【参考】他経・論釈の念仏　13

一、『往生要集』と『選択本願念仏集』との念仏為本の相違　15

①『要集』の「往生之業念仏為本」の意　15

②『選択本願念仏集』の「往生之業念仏為本」の意　20

一、法然聖人の信心と念仏の関係性　25

・行行相対（諸行に対する称名【行中摂信】）　25

・信心と念仏の関係性（信疑決判の文や『黒谷聖人御灯録』等の文）　25

一、宗祖の「念仏為本」の相承と、信心正因　26

「念仏為本」　26

信心正因　27

速欲離生死　二種勝法中
且閣聖道門　選入浄土門
欲入浄土門　正雑二行中
且抛諸雑行　選応帰正行
欲修於正行　正助二業中
猶傍於助業　選応専正定
正定之業者　即是称仏名
称名必得生　依仏本願故

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

願以此功徳　平等施一切
同発菩提心　往生安楽国

（過去の提要判決）　昭和36年度　念仏為本　判決

資料提供　井上敬信さん

綜　理：増山　顕珠　勧学
本講師：桐渓　順忍　勧学　　講題：『浄土文類聚鈔』
典　議：土井　忠雄　司教

【論題提要】
第二、念佛爲本
題意
　信因稱報と開顯された祖釋を鑑として、元祖の念佛爲本の本義を明らかにするにある。
出據
　○選擇集標宗の文「南無阿彌陀佛　往生之業念佛爲本」
　○銘文51「南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本といふは、安養淨刹の往生の正因は念佛を本とすとまふすみことなり。正因といふは、淨土へむまるゝたねとまふすなり」
論點
　一、元祖の教意
　二、宗祖の開顯
　三、念佛爲本の所顯

【「念仏為本」判決】
念佛為本の研究の目的は、元祖の念佛為本の本義を尋ねて、元高二祖の教義が全く同一であることを明らかにするにある。
元祖は「選択集」に、往生之業念佛為本と示して、念佛往生義を明された。この念佛は称念佛名であり、称名が唯一の往生の業因である旨を示されたものである。宗祖は、利益章に示された念佛の無上功徳等の文意に着眼し、元祖の本義を開顕して信因称報の義を確立された。
元祖は、浄土教初開の時運に当って行々相対し、相の顕著なものについて念佛為本と示し、宗祖は浄土門内の眞仮を明らかにするために、機受の要を的示して信心正因と開顕されたものである。
このたびの会読においては、全体として宗祖の伝承の眞意を明らかにしようと努めたことは意義深いことであったが、所顕については今一歩の研究を進めたならば一層有意義な会読となったことであろう

以上

（過去の判決）　平成18年度　念仏為本　判決

平成18年　高田慈昭和上典義
〔題意〕
　法然上人は往生之業念仏為本と標示し、第十八願を念仏往生の願と示された。宗祖もその法義を継承された。ここに念仏往生の本義をうかがい、さらに、信心正因と矛盾せず、称名正因と異なる義を明らかにする。

〔出拠〕

『選択集』標宗の文

「南無阿弥陀仏往生之業念仏為本」、

『往生要集』（『真聖全』一、八四七）「助念方法」総結要行の文、

『本典』「行文類」に、『選択集』標宗の文と総結三選の文を引いて、『選択集』全体を総括して念仏為本の法義を示される。

『銘文』広（『真聖全』二、五九五）同略（『同』二、五七一）に『選択集』標宗の文を釈して

「〈南無阿弥陀仏往生之業念仏為本〉といふは、安養浄土の往生の正因は念仏を本とすと申す御ことなりとしるべし。正因といふは、浄土に生れて仏にかならず成るたねと申すなり」と。

『唯信鈔文意』（『同』二、六二五）には

「すでに称名の本願は選択の正因たること悲願にあらはれたり」

等と。

その他、「念仏為本」に関する類文は多い。

〔釈名〕

「念仏」とは称念仏名である。一般に念仏といえば、観念仏体、憶念仏徳、実相念仏等、種々あるが、今は、弥陀の仏名を称念する口称である。

「為本」とは、「本」は根本、宗本の義である。余なしという意味で、往生の因は念仏を根本として余他をみない意である。異本に「念仏為先」とあるが、同義である。

〔義相〕

一、『選択集』と『往生要集』の念仏為本

「往生之業念仏為本」は、もと『往生要集』中末、第五「助念方法」総結要行の文である。『選択集』標宗の文はこの文に拠るが、『要集』と文は同じであっても、義は少しく異なる。『往生要集』の念仏は、一往、要門中の念仏とみられる。法然上人は『要集』を三例をもって見、結論として弘願他力念仏と同じとした。宗祖は『末灯鈔』に「恵心院の和尚は、『往生要集』には、本願の念仏を信楽するありさまをあらはせるには、〈行住座臥を簡ばず、時処諸縁をきらはず〉と仰せられたり」とある。

さて、『選択集』の語は、まず「南無阿弥陀仏」と名号をかかげ、次に「往生之業念仏為本」の八字を挙げてある。六字の標挙は、第十八願、選択本願の念仏であり、称名正定業である。法然上人は念仏一行によって万人が往生をとげる浄土教を独立された。その根拠は善導大師の称名正定業義であり、選択本願の念仏と開顕されたのである。即ち「本願章」には一切の諸行を選捨し、念仏一行を選取されたのは凡夫悪人を救う如来大悲の選択にもとづくものであった。念仏一行こそ、如来随自意の行法と判じ、さらに勝劣難易の分別をして、念仏は勝易の二徳を具すると示された。更に称名正定業を明かし、善導大師の六字釈を引証し、他力による念仏義を開顕され、極悪最下の人のために極善最上の法たる念仏は、他力念仏義であることを顕された。それは三心具足の念仏であり、信疑決判して、信心をもって能入すと示された。念仏は名号を信受して称える他力の念仏である義を明確にされたのである。

二、念仏の物体について

念仏為本という念仏の物体は名号である。念仏とは三心より出でた他力の称名である。法然上人の念仏為本の念仏は、衆生の能称の功をみない、名号の徳用から称名正定業という、称即名の他力行である。

宗祖は、「行文類」に『択集』の標宗と総結三選の文を引用して、『選択集』の始終全体を総括して引用されている。法然上人の念仏往生義をそのまま継承して、第十八願名を「念仏往生之願」「選択本願」と出され、随処にその言を用いられている。ただ宗祖は法然上人の一願建立の立場に対して五願開示して機法の分斉を鮮明にされ、称名行を第十七願所誓の大行として法体名号の活動相と展開されている。

衆生の称名はその体名号であって、名号は名声と立誓なされた通り、称となる徳をもっている。それは名号に内蔵する讃嘆門功徳である。従って、衆生の能称のまま、仏の法体名号の活動相である。これは能称所称不二の故に宗祖は「念仏則是南無阿弥陀仏」と「行文類」に示されている。称名は名号を領受した信心より露現するものであって「真実信心必具名号」と釈されるものである。声でない名号はないのである。即ち他力の称名は信心より必然的に露現したものである。

三、称名正因と称名正定業

次に善導・法然二師は称名正定業を立てて、念仏往生の一義をもって勧化されたが、宗祖は、信心正因と示された。この称名正定業と信心正因の法義は、一見相違するようである。称名正定業は、称名の体、名号の立場から業因を定め、信心正因は往生成仏の因が決定するのは、信受機受であると顕すのである。この場合は、称名は信後相続の作業となるから、信心正因称名報恩の法門となる。したがって称名について行徳の側から正定業を成じ、機の用心からいえば報恩となる。元祖と宗祖の間に化風が異なるのであって、元祖は、外聖道門の諸行に対して行々相対し、浄土門の行体を確定されたのであるが、宗祖は、対内的に浄土門内に機受の極要を示して、信心正因の義を確立されるのである。両者は矛盾せず、当然両立する。宗祖にあっても、対外的に聖道諸行に比対するときは、念仏諸善比校対論と、念仏往生の法門をかかげられている。

更に称名正定業義が称名正因義にならないかとの疑問がある。

称名正因とは、第二十願真門自力念仏の立場であって、衆生の能称の功を積集して、己が功徳として、浄土へ回向願求する自力の念仏である。自力心を以て能称の功をつのり、己が善根と励んで往生の業因に擬する自力念仏が称名正因説である。これに対して称名正定業は、所称の名号の徳用から正決定の業因とする。所謂、称名即名号という他力念仏を顕すのであるから、混同してはならない。

『銘文』には「安養浄土の往生の正因は念仏を本とす」と仰せられているが、この文は『選択集』標宗の文を釈されたものであって、南無阿弥陀仏の標挙をかかげて法体名号にもとづく念仏一行を往生の因とされたものである。正因とあっても、衆生の能称の功徳を因とされたものでない。

また念仏往生の法目は、宗祖も用いられているが、元祖の念仏往生は第十八願の「乃至十念」をもって一願建立の立場から行々相対して浄土の行体を発揚されたものであるが、宗祖の場合

は、同じ念仏往生の宗義であっても五願開示して法体と機受を分明にされ、念仏即ち衆生の称名を法体にまきあげて、第十七願所誓の我名を大行と示されたのである。

「行文類」には大行を出体して「称無礙光如来名」として衆生の称名となる名号即ち名声という義を大行として開顕されたのである。即ち能称所称不二の大行である。故に念仏往生といっても称即名に帰し法体名号の活動相を衆生の称名のところで顕されたものである。したがって念仏と云うときは、法体・信心・称名の三法相即の念仏である。

四、信心正因と念仏為本

以上のごとく、念仏為本の念仏は、他力行としての正定業であり、衆生の能称の功をみるものではない。また、称名正定業義も、能称の功をつのって往生の業因に擬する称名正因説ではなく、信心正因の法義と相違するものではない。よって念仏為本は決して信心正因と矛盾するものではなく、往生の正因については、元祖も『選択集』の「三心章」に「生死之家以疑為所止涅槃之城以信為能入」と述べられるとおり、信疑をもって迷悟の岐路とされているのである。

以　上

（過去の判決）　平成28年度　念仏為本　判決

「念仏為本」判決

【題意】

念仏為本という言葉は法然聖人の『選択集』冒頭の標宗の文にある。これは宗祖が示された信心正因と矛盾するものではないこと、また称名正因とも異なることを明らかにする。

【出拠】

『選択集』標宗の文

【釈名】

「念仏」の「念」には憶念・観念・称念、「仏」には仏徳・仏体・仏名との意味があり、「念仏」の意味としては憶念仏徳・観念仏体・称念仏名などが考えらえるが、ここでの念仏は称念仏名である。「為本」とは為正の意で正しき因となすという意味である。まとめると「念仏為本」は、称名念仏一つが往生という結果を引き起こす正しき因となる力用であるという意味となる。

【義相】

一、標宗の意義

『選択集』では、「選択本願念仏集」という題号に続いて「南無阿弥陀仏　往生之業　念仏為本」という『選択集』全体の内容を端的に示す言葉が置かれている。これを標宗の文という。標宗の文は題号の「念仏」が観念の念仏ではなく、南無阿弥陀仏の名号を口称する称名念仏であると示し、この口称念仏をもって往生業の根本とすることを、以下十六章を通して展開していく旨を標示したものである。

二、『往生要集』における「往生之業　念仏為本」の意義

「往生之業　念仏為本」という語は、もともと源信和尚の『往生要集』大文第五助念方法の第七総結要行に、何れの行業を往生の要とするかという問いを設けて、大菩提心・護三業・深信・至誠・常・念仏・随願の七法を挙げるなか、その六番目の念仏について「往生之業　念仏為本」といわれているのである。この念仏は、「仏を称念するは、これ行の善なり」とあるので称名念仏であることは明確であるが、助念方法そのものについて、「一目の羅は鳥を得ることあたはず、万術をもつて観念を助けて、往生の大事を成ず」といわれているので、この称名念仏は観念念仏を助けるためのものであると位置づけられる。

ちなみに、法然聖人は『往生要集大綱』において、「往生之業　念仏為本」の念仏は前後の六法の助けをかりて往生の行となるもので、一旦は、いわゆる助念仏の位にあるものと解している。しかしながら『往生要集』大文第八念仏証拠には、『大経』三輩段のそれぞれに往生業として「一向専念」の念仏が共通して説かれていることが示され、四十八願の中で念仏往生を誓われた第十八願が特別な願として重視され、さらに『観経』下下品の意をもって、極重の悪人には念仏より他に往生の道はないと述べられていることについて、法然聖人は「これすなはちこの『集』の本意なり」と記し、第十八願所誓の称名念仏こそが、『往生要集』の最も重要な行業であると解している。『選択集』において「南無阿弥陀仏　往生之業　念仏為本」と標されたのはこの理解に基づく。

三、『選択集』における「往生之業　念仏為本」の意義

①偏依善導

・善導の称名正定業の意義

善導大師は第十八願の「乃至十念」を「下至十声」等と釈し、また『観経疏』「散善義」の就行立信釈で、まず往生行を正行・雑行の二行に分け、五正行の中、第四の称名念仏を正定業とし、前三後一を助業としている。正定業とは、まさしく往生を決定する行業・業因の意であり、往生という結果を引き起こす原因となる力用をいう。善導大師は称名が正定業である理由を「順彼仏願故」と述べて、本願が根拠であると示している。法然聖人の念仏為本の教示は、『選択集』後述に「偏に善導一師に依る」と述べられる姿勢によるものである。

②三選の文

「三選の文」は『選択集』全体を要約した内容となっている。「三選の文」における三つの「選」は、第一の「選」によって聖道門を閣いて浄土門を選びとり、第二の「選」によって雑行を抛って正行を選びとり、第三の「選」によって助業を傍らにして正定業を選びとることが教示される。最後に正定業とは称名であると示された後、「名を称すれば、かならず生ずることを得。仏の本願によるがゆゑなり」と結ばれ、善導大師を承けて称名正定業は本願を根拠とすると述べられる。

③為本と為先

『本典』の後拔によれば、宗祖が法然聖人から付属された『選択集』には、「念仏為本」となっていたことが窺われる。その他、大谷大学蔵鎌倉時代書写本並びに本山蔵版『七祖聖教』所収本のいずれもが「念仏為本」となっている。一方、京都府廬山寺蔵書写本や奈良県当麻寺往生院元久元年書写本は「念仏為先」となっている。このように、諸本によって「為本」と「為先」との相違はあるが、「為先」といっても前後という意味ではなく、最要という意味であり、意味は「為

本」と同じである。

四、法然における念仏と信心

・信疑決判、念仏為本と標する意義

『選択集』「三心章」では、「生死の家には疑をもつて所止となし、涅槃の城には信をもつて能入となす」との文があり、信疑によって、迷悟が分かれるという信疑決判が示されている。

しかし、標宗の文において往生の業について念仏為本と示されているように、『選択集』全体の所顕は念仏往生である。信心も念仏も名号領受の相であるが、法然聖人は浄土宗独立という対外的意図から、本願の行たる念仏と非本願の行たる諸行とを行々相対して「往生之業　念仏為本」と標したのである。言うまでもなく、この念仏は行中摂信の念仏であり、また名号願力の活動相としての念仏である。

五、宗祖における信心と念仏

①「念仏為本」の継承

宗祖は「行文類」大行出体釈に大行を「称無礙光如来名」と称名で示し、また標宗の文と「三選の文」とを『選択集』一部の要として引用している。その他、破闇満願が称名で語られる等、信心のみが強調され、称名念仏が軽んじられているのではない。宗祖が師法然聖人の「念仏為本」を忠実に継承していることは明らかである。

②信心正因と念仏為本の関係

信心も念仏も名号領受の相である。念仏為本は名号の活動相として顕著な念仏において業因を語るものである。したがって教行証の三法組織となり、行と証とが直接して名号独用を示している。信心正因は名号領受の極要である信心において正因を語るものである。したがって教行信証の四法組織となり、信と証とが直接して、往因決定は名号領受の時すなわち信一念であるという唯信正因を示している。信心正因と念仏為本とは矛盾するものではない。

【結び】

念仏為本とは、阿弥陀如来の救済の力用である名号願力が衆生の上で活動している相を念仏で示したものであり、称功を認めるものではないから称名正因を意味するのではない。また信心正因と相違するものでもない。

以上

（今年の提要）2023(令和5)年度　提要

【題意】

「念仏為本」という言葉は、『選択本願念仏集』冒頭の標宗の文による。法然聖人が第十八願に立脚し開顕された念仏往生の本意と、宗祖の説示された信心正因とが矛盾しないこと、また能称の功をみる称名正因とも異なることを明らかにする。

【出拠】

『選択本願念仏集』標宗の文「南無阿弥陀仏　往生之業念仏為本」

「行文類」大行釈

「化身土文類」後序

『尊号真像銘文』広本(正嘉本)・略本(建長本)他

【釈名】

「念仏」「為本」

【義相】

一、『往生要集』と『選択本願念仏集』との念仏為本の相違

①『要集』の「往生之業念仏為本」の意

②『選択本願念仏集』の「往生之業念仏為本」の意

・『選択本願念仏集』の標宗の文意

(善導大師の本願念仏の継承・如来選択の本願念仏)

・「為本」と「為先」

一、法然聖人の信心と念仏の関係性

・行行相対(諸行に対する称名【行中摂信】)

・信心と念仏の関係性(信疑決判の文や『黒谷聖人御灯録』等の文)

一、宗祖の「念仏為本」の相承と、信心正因

平成18年判決にしたがう。

『選択集』標宗の文（『聖典全書』一巻1253頁）（『註釈版』七祖篇1183頁）

南無阿弥陀仏　往生之業
念仏為本（大谷大学蔵鎌倉時代書写・本派本願寺蔵）
先（当麻寺奥院蔵（往生院本）・廬山寺本）

『往生要集』助念方法　総結要行
（『聖典全書』一巻1151頁）（『註釈版』七祖篇1030頁）

【54】　第七に総結要行とは、問ふ、上の諸門のなかに陳ぶるところすでに多し。いまだ知らず、いづれの業をか往生の要となす。答ふ。大菩提心と、三業を護ると、深く信じ、誠を至して、常に仏を念ずとは、願に随ひて決定して極楽に生ず。いはんやまた、余のもろもろの妙行を具せらんをや。　問ふ。なんがゆゑぞ、これらを往生の要となす。答ふ。菩提心の義は、前につぶさに釈するがごとし。三業の重悪はよく正道を障ふ。ゆゑにすべからくこれを護るべし。往生の業は念仏を本となす。その念仏の心は、かならずすべからく理のごとくすべし。ゆゑに深信・至誠・常念の三の事を具す。常念に三の益あり。迦才のいふがごとし。「一には諸悪の覚観、畢竟じて生ぜず。また業障を消することを得。二には善根増長し、また見仏の因縁を種うることを得。三には薫習熟利して、命終の時に臨みて、正念現前す」（浄土論）と。〔以上〕業は願によりて転ず。ゆゑに随願往生といふ。総じてこれをいへば、三業を護るは、これ止の善なり。仏を称念するは、これ行の善なり。菩提心および願は、この二の善を扶助す。ゆゑにこれらの法を往生の要となす。その旨経論に出でたり。これをつぶさにすることあたはず。

『本典』「行文類」（『聖典全書』二巻48頁）（『註釈版』187頁）
に、『選択集』標宗の文と総結三選の文を引いて、『選択集』全体を総括して念仏為本の法義を示される。

『選擇本願念佛集』（源空集）云、「南无阿彌陀佛A往生之業B念佛爲本C」
又（選擇集）云、「夫速欲離生死、二種勝法中且閣聖道門、選入淨土門。欲入淨土門、正雜二行中且抛諸雜行、選應歸正行。欲修於正行、正助二業中猶傍於助業、選應專正定。正定之業者卽是稱佛名。稱名必得生。依佛本願故。」
W已上R

『銘文』（『聖典全書』二巻640頁）（『註釈版』665頁）

〔正嘉本〕
「選擇本願念佛集」といふは、聖人の御製作

〔建長本〕
日本源空聖人ののたまはく、『選擇本願念佛集』

也。

「南无阿彌陀佛往生之業念佛爲本」といふは、安養淨土の往生の正因は念佛を本とすとまふす御こと也としるべし。

正因といふは、淨土にむまれて佛にかならずなるたねとまふすなり。

にいはく、

「南无阿彌陀佛往生之業念佛爲本」といふは、安養淨刹の往生の正因は念佛を本とすとまふすみことなり。

正因といふは、淨土へむまるゝたねとまふすなり。

『唯信鈔文意』(『聖典全書』二巻691頁)(『註釈版』703頁)

「すでに称名の本願は選択の正因たること悲願にあらはれたり」

等と。

間違えやすい類文(このとき念は心念)

『西方指南抄』巻中本　五、十八条法語　第十一条(『聖典全書』三巻932頁)

又云、往生の業成は、念をもて本とす。名號を稱するは、念を成ぜむがため也。もし聲はなるゝとき、念すなわち懈怠するがゆへに、常恆に稱唱すればすなわち念相續す。心念の業、生をひくがゆへ也。

釈名

念仏

サンスクリット

buddhānusmṛti　念仏。仏を憶念する。

転じて仏の相好を等を念観

或いは仏の名号を唱ふるの意に用いられる　(望月仏教大辞典)

buddha　覚者。知者。或いは覚と訳す。(望月仏教大辞典)

smṛti　憶念。記憶して忘れないこと。

『倶舎論』第四(T29.19a)

「念謂於縁明記不忘」(念とは云何。謂く縁に於いて明記して忘れざるなり。)

『成唯識論』第五(T31.28b)

「云何爲念。於曾習境令心明記不忘爲性。定依爲業。」

(云何が念と為。曾て習へる境に於いて心をして明記不忘ならしむるを性と為し、定の依たるを業と為す。)

字義(諸橋大漢和辞典)

念　①おもふ㋑こころにかける㋺おぼえる

④となへる。くちずさむ。

⑧極めて短い時間

佛　⑨ほとけ。梵語Buddhaの音訳。覚者の意。

『観経疏』玄義分　釈名門（『聖典全書』一巻658頁）（『註釈版』七祖篇301頁）

「仏」といふはすなはちこれ西国（印度）の正音なり。この土（中国）には「覚」と名づく。自覚・覚他・覚行窮満、これを名づけて仏となす。

「自覚」といふは凡夫に簡異す。これ声聞は狭劣にして、ただよく自利のみありて、闕けて利他の大悲なきによるがゆゑなり。

「覚他」といふは二乗に簡異す。これ菩薩は智あるがゆゑによく自利し、悲あるがゆゑによく利他し、つねによく悲智双行して有無に着せざるによる。

「覚行窮満」といふは菩薩に簡異す。これ如来は智行すでに窮まり、時劫すでに満ちて、三位を出過せるによるがゆゑに、名づけて仏となす。

Q　「念仏為本」の念仏は？

A　『選択集』念仏為本の念仏は称念仏名。

『往生要集』の念仏為本の念仏は称念と観念の両通。詳しくは義相に譲る。

為

（諸橋大漢和辞典）

為　①なす。㋑つくる。こしらへる。㋺行ふ㋩ほどこす。㋥みなす。

②なる。㋑出来上がる。成就する。㋺此の状から彼の状に移り変わる。

⑳すなはち。上を承けて下を起こす詞。㋑則に同じ㋺乃に同じ

㉑これ。発語の助辞。是に同じ。

本

（諸橋大漢和辞典）

本　①もと。㋑ね。ねもと。根。㋺みき。幹。㋩もとゐ。どだい。根基。㋥おこり。はじめ。始。本末、終始也。㋭みなもと。原泉。㋬きぢ。したぢ。本質。㋣吾が身。㋠かなめ。切要。

先　①すすむ。すすめる。

②さき。㋑はじめ。始。㋺まへ。首。㋩第一

③むかし。以前。

④さきだち。さきがけ。

⑨まづ。さきに。㋑はやく。はやい。㋺まつさきに。さきだちとなって。

②ただしい。まこと。

③もとづく。もととする。

④この。これ。ここ。当該。

本体　まことのすがた。その物の正体。

本当　まこと。真実。

⑩さきにする。さきんずる。㋑たつとぶ。㋺推す。譲る。㋩たかい。すぐれる。㋥重んずる。

合釈

廃立義　（本の④義　本体・正体）

（往生の業は）ブッダを（おもふ／となへる）ことが正体である。
佛　念　本　為

正助（根本枝末、先後）の義　余行を従えて念仏を首とする義

（往生の業は）ブッダを（おもふ／となへる）ことが（根本／第一）である
佛　念　本　為　先

義相

（参考）無量寿経の念仏

無量寿経

『大経』	『如来会』	藤田宏達『梵本和訳無量寿経阿弥陀経』
第十八願 乃至十念 （『聖典全書』二巻67頁） （『註釈版』212頁）	第十八願 乃至十念	第十八願 浄信の心をもってわたくしを随念する （浄信 prasannacitta　澄み切って清らかとなり静かな喜びや満足の感ぜられる心）＝（信 prasāda）と同意。（随念 anusmareyus） 第十九願 「たとえ十たび心を起こすことによってでも」 （十 daśabhiś　念 cittopādaparivartaiḥ）
第十八願成就文 信心歓喜乃至一念	乃至能発一念浄信歓喜愛楽 （『聖典全書』二巻93頁）（『註釈版』250頁）の引用の仕方は特殊	たとえ一たび心を起こすことだけでも浄信にともなわれた深い指向をもって心を起こすならば 乃至一念 ekacittopādam　浄信 prasāda
三輩段 （上）一向専念無量寿仏 （中）一向専念無量寿仏	専念無量寿仏 専念無量寿仏	彼の如来を様相の上からいくたびも思念し かしこの仏国土に心をかけるであろう者

（下）一向専意乃至十念念無量寿仏乃至一念念於彼仏以至誠心願生其国	以清浄心向無量寿如来乃至十念念無量寿仏獲得一念浄心。発一念心　念無量寿仏	十たび心を起こすことによって随念十念 daśacittopādāt一たび心を起こすことだけでも、彼の如来を思念し、彼の仏国土に対して切望を起こすであろうならば
弥勒付属歓喜踊躍乃至一念	一念喜愛之心（『聖典全書』一巻334頁）	たとえ一たびでも心の浄信を得るであろう衆生たち

『選択集』「利益章」（『聖典全書』一巻1281頁）（『註釈版』七祖篇1223頁）

いまこの「一念」といふは、これ上の念仏の願成就のなかにいふところの一念と下輩のなかに明かすところの一念とを指す。願成就の文のなかに一念といふといへども、いまだ功徳の大利を説かず。また下輩の文のなかに一念といふといへども、また功徳の大利を説かず。この〔流通分の〕一念に至りて、説きて大利となし、歎めて無上となす。まさに知るべし、これ上の一念を指す。

「行文類」（『聖典全書』二巻96頁）（『註釈版』254頁）菩提心の心を釈して〈質多〉とは天竺の音なり、この方には心といふ。心とはすなはち慮知なり」と。〔以上〕

【参考】他経・論釈の念仏

『雑阿含経』33巻（T02.0237c21）

六念（如来、法、僧、戒、施、天を念ずる）の念如来

何等六念。謂聖弟子念如來事。如來・應（供）・等正覺（正遍知）・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊。

（仏は十号具足の応等正覚者であると念ずる）

『増一阿含経』第二広演品（T02.0554a）

世尊告曰。若有比丘正身正意。結跏趺坐繫念在前。無有他想專精念佛。觀如來形未曾離5目。已不離目便念如來功德。

如來體者。金剛所成十力具6長。四無所畏在衆勇健。

如來顏貌端正無雙。視之無厭。戒德成就。猶如金剛而不可毀。清淨無瑕亦如7琉璃。

如來三昧未始有減。已息永寂而無他念。憍慢強梁諸情憺8怕。欲意恚想愚惑之心。猶豫9網結皆悉除盡。

如來慧身。智無10崖底。無所罣礙。

如來身者。解脱成就諸趣已盡無復生分。言我當更墮於生死。

如來身者。度知見11城知他人根應度不度。12此死生彼周旋往來生死之際。

有解脱者無解脱者。皆具知之。

是謂修行念佛便有名譽。成大果報諸善普＊至。得甘露味至無爲處。便成神通除諸亂想。

獲沙門果自致涅槃。是故諸比丘。常當思惟不離佛念。

（仏の相好を観じ、仏の功徳（十力・四無所畏、戒・定・慧・解脱・解脱智見など）を念ずる）

『般舟三昧経』（T13.897a）

即問。持何法得生此國。

阿彌陀佛報言。欲來生者當念我名。莫有休息則得來生。

佛言。專念故得往生。常念佛身有三十二相八十種好。巨億光明徹照。端正無比。在菩薩僧中説法不壞色。

（称名し、常に仏身の相好、光明、サンガの中で説法しても色あせないことを念ずる）

『華厳経』巻七（T9.437b）

念佛三昧必見佛　命終之後生佛前

見彼臨終勸念佛　又示尊像令瞻敬

『同』巻四六（T9.690a）

善男子。我唯知此普門光明觀察正念諸佛三昧。豈能了知菩薩圓滿清淨智行。諸大菩薩得圓滿普照念佛三昧門。悉能覩見一切諸佛及其眷屬。嚴淨佛刹。

得一切衆生遠離顛倒念佛三昧門。隨一切衆生所應悉令清淨。

得一切力究竟念佛三昧門。正念修習諸佛十力。

得諸法中心無顛倒念佛三昧門。悉得覩見一切佛雲。於彼佛所聞法受持。

得分別十方一切如來念佛三昧門。悉見一切世界海中諸如來海。

得不可見不可入念佛三昧門。於微細境界。見一切佛自在境界。

得諸劫不顛倒念佛三昧門。於一切劫。常見諸佛未曾遠離。

得隨時念佛三昧門。於一切時常見諸佛

得嚴淨佛刹念佛三昧門。起一切佛刹。無能壞者。普見諸佛。

得三世不顛倒念佛三昧門。悉見三世諸佛及其眷屬。

得無壞境界念佛三昧門。於一切境界悉見諸佛。

得寂靜念佛三昧門。於一念中。悉見一切世界中一切如來。示現涅槃。

得離月離時念佛三昧門。於一日中。悉見一切如來遊行教化。

得廣大念佛三昧門。見一佛身結跏趺坐。充滿法界。

得微細念佛三昧門。於一毛孔。見一切佛成等正覺。

得莊嚴念佛三昧門。於一念中。見一切佛。於一切世界。成等正覺。神力自在。

得清淨事念佛三昧門。見一切佛。慧光普照。轉妙法輪。

得淨心念佛三昧門。自心明了。見一切佛。

得淨業念佛三昧門。見一切衆生諸業如鏡中像

得自在念佛三昧門。見一切莊嚴法界諸佛充滿。

得虛空等念佛三昧門。見如來身普照法界及虛空界。

十住毘婆沙論（No. 1521　龍樹造　鳩摩羅什譯）（T26.86a）

助念佛三昧品第二十五

菩薩應以此　四十不共法

念諸佛法身　佛非色身故
是偈次第略解四十不共法六品中義。是故
行者先念色身佛。次念法身佛。何以故。
新發意菩薩。應以三十二相八十種好念佛。如先説。
轉深入得中勢力。應以法身念佛心。
轉深入得上勢力。應以實相念佛而不貪著
不3染著色身　法身亦不著
善知一切法　永寂如虚空
是菩薩得上勢力。不以色身法身深貪著
佛。何以故。信樂空法故。知諸法如虚空。虚
空者無障礙故。障礙因縁者。諸須彌山由乾
陀等十寶山。鐵圍山黒山石山等。如是無量 画像
障礙因縁。何以故。是人未得天眼故。念他
方世界佛。則有諸山障礙。是故新發意菩薩。
應以十號妙相念佛。如説
新發意菩薩　以十號妙相
念佛無毀失　猶如鏡中像
十號妙相者。所謂如來應4供正遍知明行足
善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世
尊。無毀失者。所觀事空如虚空。於法無
所失。何以故。諸法本來無生寂滅故。如是一
切諸法皆亦如是。是人以縁名號増長禪。

『興福寺奏状』貞慶（『聖典全書』六巻770頁）
第七に念仏を誤る失。先づ所念の仏において名あり体あり。その体の中に事あり理あり。次に能念の相について、或いは口称あり、或いは心念あり。かの心念の中に、或いは繋念あり、或いは観念あり。かの観念の中に、散位より定位に至り、有漏より無漏に及ぶ。浅深重重、前劣後勝なり。然れば口に名号を唱ふるは、観にあらず、定にあらず、是れ念仏の中の麤なり、浅なり。

一、『往生要集』と『選択本願念仏集』との念仏為本の相違

①『要集』の「往生之業念仏為本」の意

Q　『往生要集』の「念仏為本」の言葉はどこにあるか？

A

一は厭離穢土、
二は欣求浄土、
三は極楽証拠、
四は正修念仏、

五は助念方法、　第七総結要行
六は別時念仏、
七は念仏利益、
八は念仏証拠、
九は往生諸業、
十は問答料簡

Q　助念方法とは何か
A　正修念仏（止観を中心とした観念）を助ける。
　助念方法（一、1113）（『註釈版』七祖篇966頁）
　【47】　大文第五に、助念方法といふは、一目の羅は鳥を得ることあたはず、万術をもつて観念を助けて、往生の大事を成ず。
Q　総結要行とは何か
A　正修念仏・助念方法をふさねて、往生の要行を示す文。
Q　文を読め
A　（『聖典全書』一巻1151頁）（『註釈版』七祖篇1030頁）
　【54】　第七に総結要行とは、問ふ、上の諸門のなかに陳ぶるところすでに多し。いまだ知らず、いづれの業をか往生の要となす。答ふ。大菩提心と、三業を護ると、深く信じ、誠を至して、常に仏を念ずとは、願に随ひて決定して極楽に生ず。いはんやまた、余のもろもろの妙行を具せらんをや。
　問ふ。なんがゆゑぞ、これらを往生の要となす。答ふ。菩提心の義は、前につぶさに釈するがごとし。三業の重悪はよく正道を障ふ。ゆゑにすべからくこれを護るべし。往生の業は念仏を本となす。その念仏の心は、かならずすべからく理のごとくすべし。ゆゑに深信・至誠・常念の三の事を具す。常念に三の益あり。迦才のいふがごとし。「一には諸悪の覚観、畢竟じて生ぜず。また業障を消することを得。二には善根増長し、また見仏の因縁を種うることを得。P- - 1031
　三には薫習熟利して、命終の時に臨みて、正念現前す」（浄土論）と。〔以上〕業は願によりて転ず。ゆゑに随願往生といふ。総じてこれをいへば、三業を護るは、これ止の善なり。仏を称念するは、これ行の善なり。菩提心および願は、この二の善を扶助す。ゆゑにこれらの法を往生の要となす。その旨経論に出でたり。これをつぶさにすることあたはず。

念仏為本　「往生之業念仏為本」の語は『往生要集』総結要行に出るが、この念仏について観念と見るか称念と見るかで『要集』の性格が大きく変わる。『要集』の念仏には多義があり大文第十問答料簡（一・一二一五）に分類をしている。図示すると、

- 定業
  - 無相業　……畢竟空　　最上の三昧
  - 有相業
- 散業 ── 念名号・厭穢求浄

となる。『要集』の中心といえる正修念仏の観察門は一別相観、二総相観、三雑略観が説かれ、

有相業に当たる。それは正修念仏の冒頭に

初心の観行は深奥に堪えず　（一・一〇九五）

とことわって説かれるものであるから、正修念仏は初心の人のために有相を説くのである。しかし念仏の行として勝れているのは相を離れ無二に通達して第一義に入る無相業であると判じていた。

また観称両通とする義は大文第四正修念仏、大文第五助念方法に見える。正修念仏の観察門雑略観には

若し相好を観念するに堪へざることあらば、或いは帰命の想に依り、或いは引摂の想に依り、或いは往生の想に依りて、一心に称念すべし。［以上、意楽不同なり。故に種々の観を明かす。］　（一・一一〇八）

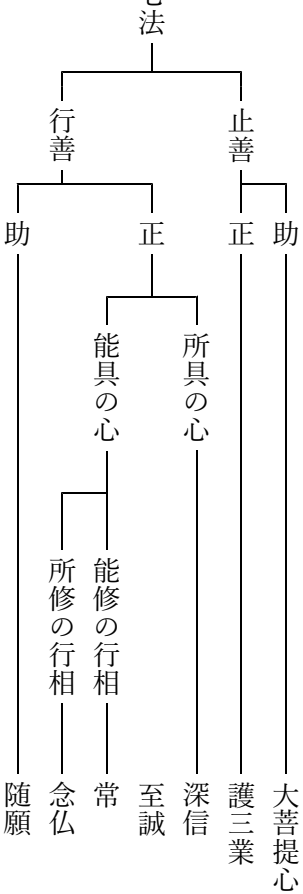
といい、大文第五助念方法第二修行相貌には問答を設けて

問ふ。念仏三昧は、唯だ心に念ずとやせむ、亦口に唱ふとやせむ。

答ふ。『止観』の第二に云ふが如し。「或いは〔唱念〕倶に運び、或いは先づ念じ後に唱へ、或いは先づ唱へ後に念じて、唱・念相継ぎて休息する時無し。声々念々唯阿弥陀に在り」と。　（一・一一一七）

示された。したがってここでいう「観念」は正修念仏の観察門、「称念」は相好観念不堪の者に示される称（唱）と念（想）としなければならない。

また「等」の語は総結要行の七法のうち「念仏」以外の六法を指していると思われる。淺田惠真は『往生要集講述』（四九七頁）に八木昊恵の『恵心教学の基礎的研究』を引き、



と七法の関係を示される。この「念仏」を指して総結要行の最後には「称念仏」と示されるが『要集』当面では「称」と「念仏」と見るのが穏当であろう。

Q　『大経』「乃至十念」を『要集』はどのように読んだのか？

A　一応は念観両通。再往は称名に帰着せしめる。

Q　再往は称名に帰着する義はどなたの指南に拠るのか

A　道綽禅師・善導大師に拠る。

「大文第六別時念仏」第二臨終行儀（『聖典全書』一巻1162頁）（『註釈版』七祖篇1047頁）

道綽禅師『安楽集』の十念相続を引用したあとに（『観経』下下品と照応して）

いふところの「十念」といふは、多くの釈ありといへども、しかも一心に十返「南無阿弥陀仏」と称念する、これを十念といふ。この義、経の文に順ぜり。

Q　善導大師の指南如何。

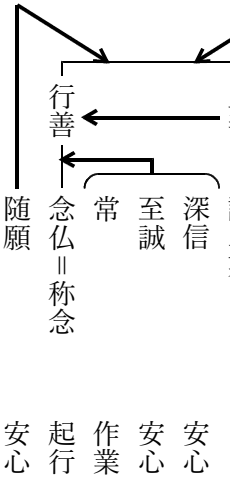
A　『礼讃』前序の二種深信に拠ると思われる。

「大文第五助念方法」修行相貌　『礼讃』引文　（『聖典全書』一巻1116頁）（『註釈版』七祖篇970頁）

いま弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下十声・一声等に至るに及ぶまで、さだめて往生を得と信知して、乃至一念も疑心あることなきなり。

（本弘誓願の行業は名号を称すること下十声・一声等である）

法然聖人は総結要行の念仏を「略例」と呼んで助念門の称名をあらわすと見ていた。『往生要集釈』（六・八三）に「称念仏」を「仏を称念するは」と読み、善導大師の示された安心・起行・作業の法門構造を以て七法を見るので、その関係はおのずから再構築される。



大菩提心・随願は止善と行善を扶助する。悪業を止めるという消極的な善によって三業が護られ、積極的に善を修することを助けていく。深信・至誠・常は称名念仏一行に統摂される能修の心と修相である。このように称名念仏を他の六法が扶助していくという構造で、この扶助を必要とする称名念仏の法門を指して、

此の『要集』の意は助念仏を以て決定の業とするか。但し善導和尚の御意は爾らず。（六・八五）

と、判定している。『和語燈録』巻五諸人伝説の詞には

本願の念仏には、ひとりだちをせさせて助をさゝぬ也。助さす程の人は、極楽の辺地にむまる。すけと申すは、智慧をも助にさし、持戒をもすけにさし、道心をも助にさし、慈悲をもすけにさす也。それに善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、たゞむまれつきのまゝにて念仏する人を、念仏にすけさゝぬとは申す也。

（六・六一一）

と示し、廃立の姿勢を明確にしている。

要集のこころ　源信和尚は『要集』序において自心のことを「頑魯之者」といい、顕密の教法や事理の業因は敢えることができないから、念仏一門に依って要文を集めるという著述方針を表明した。『往生要集』という名目は「できない者に往生を可能にし、覚り易く修し易い念仏の要文を集める書」ということになる。この方針に従って『往生要集』を読まなければならないというのが法然聖人の姿勢だった。

『往生要集』の名目にかなった往生の要行は総結要行の念仏ではなかった。悪を止めることができて、称名の善を扶助することができ、休息無く唱・念相継ぐことのできるような念仏を

往生の要行とされているのであるなら、「できる者のための念仏」であって著述方針と齟齬がある。

この法語の後には「要例」の念仏が説法されたことと推察される。無相観念仏ができない初心者のために有相の相好の観念仏を説き、観察不堪の者に称名念仏を勧める。源信和尚は自身を頑魯之者で観察不堪の劣った劣機と見ていただろうし、さらには下品を指して「我等」とも表現している。（大文第十問答料簡（一・一二一一））。そのような悪機にとっては『大経』に別発一願された乃至十念が往生の要行であり、『観経』を「極重悪人無他方便、唯称念仏得生極楽」と読み切った源信和尚の態度こそが『要集』名目通りの要行だったというのが「要集のこころ」である。

法然聖人からこのように教わった親鸞聖人は「化身土文類」要門釈の結びに

爾者、夫れ楞厳の和尚の解義を按ずるに、念仏証拠門の中に、第十八の願は別願中の別願なりと顕開したまへり。『観経』の定散諸機は、極重悪人、唯弥陀と称せよと勧励したまへる也。濁世の道俗、善く自ら己が能を思量せよと也、知るべし。

（二・一八七）

と示し、法然聖人の『要集』理解を相承して、正信偈に「極重悪人唯称仏」と讃嘆される。

〔平成28年度　念仏為本　判決〕

ちなみに、法然聖人は『往生要集大綱』において、「往生之業　念仏為本」の念仏は前後の六法の助けをかりて往生の行となるもので、一旦は、いわゆる助念仏の位にあるものと解している。しかしながら『往生要集』大文第八念仏証拠には、『大経』三輩段のそれぞれに往生業として「一向専念」の念仏が共通して説かれていることが示され、四十八願の中で念仏往生を誓われた第十八願が特別な願として重視され、さらに『観経』下下品の意をもって、極重の悪人には念仏より他に往生の道はないと述べられていることについて、法然聖人は「これすなはちこの『集』の本意なり」と記し、第十八願所誓の称名念仏こそが、『往生要集』の最も重要な行業であると解している。『選択集』において「南無阿弥陀仏　往生之業　念仏為本」と標されたのはこの理解に基づく。

山上のひとりごと　語は受けるが意は違う

②『選択本願念仏集』の「往生之業念仏為本」の意

『選択本願念仏集』の標宗の文意

Q　標宗とは何か

A　『選択集』全体の内容を端的に示す言葉で、結前生後である。

弁阿『徹選択集』（『浄土宗全書』七、83）

先就本選擇集之題此有三義・所謂第一本選擇集之題中・言念佛者是諸師所立之口稱念佛也・故題次行言南無阿彌陀佛也・第二本選擇集之題中・言本願者是善導所立之本願念佛也・故題次行言南無阿彌陀佛也・第三本選擇集之題中・言選擇者是然師所立之選擇念佛也・故題次行言南無阿彌陀佛也・是故本選擇集之題中雖有三重念佛之義・俱非觀念之念佛但是口稱念佛也・故題次文初置南無阿彌陀佛者即是結前生後也・結前者所謂結前題中三義俱是稱名也・生後者所謂爲顯此集所列之一一章段亦皆稱名之義也・又爲往生極樂者以此南無阿彌陀佛口稱念佛爲第一之行爲顯此義故註云往生之業念佛爲先也・又第一念佛義者是依和漢兩朝往生傳記之・第二念佛義者是依善導和尚觀經疏記之・第三念佛義者是依三部之阿彌陀經記之・此三義亦是行者之口中所唱之稱名念佛也・次就本選擇集所載之文義有其十六篇・一一之篇今當釋之・

まとめると

選択本願念仏集
- 言念佛者是諸師所立之口稱念佛也
- 言本願者是善導所立之本願念佛也
- 言選擇者是然師所立之選擇念佛也

結前

往生之業念仏為本　　題中三義俱是稱名

生後

十六章　　此集所列之一一章段亦皆稱名之義

Q　「南無阿弥陀仏」の所顕如何

A　①阿弥陀仏に対する讃嘆

『讃弥陀仏偈』（『聖典全書』一巻535頁）（『註釈版』七祖篇161頁）に倣う

『六要鈔』巻五（『聖典全書』五巻1218頁）

次『讃阿彌陀佛偈』、一卷典也。　問。題後文前安六字名、有何意耶。答。題目に「讃阿彌陀佛偈」と云うと雖も、未だ名號の功德を讃嘆すること顯さず、只だ是れ讃嘆なり。是の故に言ふ所の讃嘆は名號德に在ことを示んが爲に、是の如く題する歟。

②選択本願念仏の体は仏名である

③観念仏に簡び、諸仏名号に簡ぶ

『六要鈔』巻五（『聖典全書』五巻1218頁）

『選擇集』初に先づ名號を案ずる、宛（あたか）も此の例に由る。彼は觀念、諸佛名號等を簡異せんが爲也。

④三心（安心）・五念（起行）・四修（作業）すべて南無阿弥陀仏に統一

『和語灯録』巻五　諸人伝説の詞19（『聖典全書』六巻607頁）

源空が目には三心も南無阿弥陀仏、五念も南無阿弥陀仏、四修も南無阿弥陀仏なりと。

（善導大師の本願念仏の継承・二行章の文意）

【2】　善導和尚、正雑二行を立てて、雑行を捨てて正行に帰する文。

Q　題号の「選択」とはどういう意味か

A　選取・選捨、廃立。

Q　善導大師にその指南有りや？

A　「散善義」深心釋第五（『聖典全書』一巻763頁）（『註釈版』七祖篇457頁）

また深信とは、仰ぎ願はくは、一切の行者等、一心にただ仏語を信じて身命を顧みず、決定して依行し、仏の捨てしめたまふをばすなはち捨て、仏の行ぜしめたまふをばすなはち行じ、仏の去らしめたまふ処をばすなはち去る。これを仏教に随順し、仏意に随順すと名づけ、これを仏願に随順すと名づく。これを真の仏弟子と名づく。

Q　何を捨てたのか？

A　観仏による成仏道。

Q　仏が観仏による成仏道を捨てさせたという根拠は？

A　『観経』流通分に釋尊自らの言葉として観仏を捨てしめ、称名念仏を行ぜしめている。

爾時阿難、卽從座起、前白佛言、世尊、當何名此經。此法之要、當云何受持。佛告阿難、此經名觀極樂國土・無量壽佛・觀世音菩薩・大勢至菩薩、亦名淨除業障生諸佛前。汝當受持。無令忘失。行此三昧者、現身得見無量壽佛及二大士。若善男子・善女人、但聞佛名・二菩薩名除無量劫生死之罪。何況憶念。若念佛者、當知。此人是人中分陀利華。觀世音菩薩・大勢至菩薩、爲其勝友、當坐道場生諸佛家。

上来定散両門の益を説くといへども、

I-0099佛告阿難、汝、好持是語。持是語者、卽是持無量壽佛名。佛説此語時、尊者目犍連・阿難及韋提希等聞佛所説、皆大歡喜。

仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもつぱら弥陀仏の名を称せしむるにあり。

Q　観仏による成仏道とはどのようなものか？

A　唯識法身の観、自性清浄仏性観（『聖典全書』一巻745頁）（『註釈版』七祖篇432頁）

浄影寺慧遠『観経義疏』（T三七巻180頁）	聖典セミナー『観経』梯實圓和上182頁
是心作仏　始学名作 己の当果に望んで 彼に生ずるを観ずる 由って心作仏と名く。	どんなに濁っていても水の本体は清浄なわけですから、浄化さえすれば本来の症状を回復するように、懺悔し、滅罪して、観仏の修行をおこなえば、心の濁りが浄化され、心は本来の清浄な法身にかえる
是心是仏　終成即是 諸仏法身と己とは同体を現ず。 仏を観ずる時、心中に現ずるは 即是諸仏法身の体	法身とは、仏の無分別智によって悟られている不生不滅の法（真如・法性）のことで、衆生の煩悩の心も、その本性は清浄な法身真如そのものである

嘉祥寺吉蔵『観経義疏』（T三七巻243）	聖典セミナー『観経』梯實圓和上182頁
法身佛者文云如來是法界身。即是法身。 一切皆是法界一切皆是法身。故前作此想也。 次云是心即是三十二相八十種好。 是心作佛是心是佛。凡有三是。所以明三是者。明此三是義足 是心即是。三十二相即是應身。 是心是佛即是法身。 是心作佛即明二身因也。	法界身とは仏の法身のことであるといっていますから、基本的には慧遠大師と同じ考えでした。

聖典セミナー『観経』梯實圓和上182頁

いずれにしても、法界身とは諸仏の本性であると同時に、一切の衆生の心の本性でもある「真如・法性」そのもののことで、それを仏のがわでいえば、法身といい、衆生のうえでいえば、心の本性である本来清浄な仏性（如来蔵）のことである、と解釈されたわけです。

Q　題号の「本願念仏」とは何か？

A　二行章に明かされる五正行の中、第四の称名。

雑行を廃して、正行を立てる

雑行　正助二行を除きてのほかの自余の諸善をことごとく雑行と名づく。

正行　（開）読誦　観察　礼拝　称名　讃嘆供養（開）

（合）正定業　称名

助業　前三後一

次に合を二種となすといふは、一には正業、二には助業なり。初めの正業は、上の五種のなかの第四の称名をもつて正定の業となす。

問ひていはく、なんがゆゑぞ五種のなかに独り称名念仏をもつて正定の業となすや。

答へていはく、かの仏の願に順ずるがゆゑに。意はいはく、称名念仏はこれかの仏の本願の行なり。ゆゑにこれを修すれば、かの仏の願に乗じてかならず往生を得。その仏の本願の義、下に至りて知るべし。

（下とは本願章のこと。）

（如来選択の本願念仏・本願章の文意）

本願章

【3】　弥陀如来、余行をもつて往生の本願となさず、ただ念仏をもつて往生の本願となしたまへる文。

（『聖典全書』一巻1266頁）（『註釈版』七祖篇1201頁）

Q　選択取捨のものがら如何。

A　選捨　一切諸行（布施持戒乃至孝養父母等の諸行）

選取　念仏一行（専称仏号）

（勝易二徳）

Q　何故　称名念仏一行だけが往生の行業として本願に誓われたのか

A　勝易の二徳あるが故に。

Q　勝の徳とは？（行徳・法の側）

A　所称の名号は万徳の帰するところだから

Q　万徳とは如何？

A　一切の内証の功徳（自利）、一切の外用の功徳（利他）が具わっている。

Q　称名は勝れている。では、諸行は？

A　劣。

Q　何故？

A　屋舎の譬を以て示される。名号は屋舎で全てがそろっている。諸善万行はそれぞれが棟・梁・椽・柱等の部分であって、一切を摂めているとはいえない。

Q　名号が勝れているのは、諸行がそろっているからだというならば、諸行往生が勝れているというべし。諸善万行が全てそろえば名号と同じ価値になるのですね？

A　いいえ。阿弥陀仏の名号は一切の諸行の功徳を集めたよりも勝れている。

Q　文証如何。

A　「しかればすなはち仏の名号の功徳、余の一切の功徳に勝れたり。」

Q　理証如何。

A　余行は有上小利。念仏は無上大利。

利益章（『聖典全書』一巻1281頁）（『註釈版』七祖篇1224頁））

Q　前難未だ遮せず。小利の行をたくさん修すれば大利となるのではないか。

A　余行は有上なるがゆえに小利。念仏は無上なるがゆえに大利。量の問題ではない。

Q　有上無上の違いは何か？

A　相対と絶対の違い。行者が多善根性に着目して称名念仏を選ぶのではない。如来が本願に誓って与えられた法義だから勝れているのである。

Q　相対を越えて絶対の救済を選択されたのは何のためか？

A　平等の慈悲に催されたのであり、極悪最下の人を救うためであった。

「極悪最下の人の為にしかも極善最上の法を説く」

約対雑善讃嘆念仏章（『聖典全書』一巻1304頁）（『註釈版』七祖篇1258頁）

Q　易の徳とは？（修相・機の側）

A　念仏は修し易く、諸行は修し難し。

Q　どのように修しやすいのか？

A　障り重く、境は細く、心は粗な者に観仏は難しい。社会的地位や財力の乏しい者には造像起塔が不可能である。念仏は行住座臥を簡ばず、時処所縁を論ぜず修し易い。

Q　念仏はどのような者を救おうとされているのか？

A　一切衆生をして平等に往生せしめんがため。

文証「念仏は易きがゆゑに一切に通ず。諸行は難きがゆゑに諸機に通ぜず。しかればすなはち一切衆生をして平等に往生せしめんがために、難を捨て易を取りて、本願となしたまへるか。」

【参考】鮮妙和上（決択編巻３「選択称名」）

性と修（法性と方便法身）の選択即無選択

『唯信鈔文意』（６４８）

「法身はいろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず、ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして、方便法身と申す御すがたをしめして、法蔵比丘となのりたまひて、不可思議の大誓願をおこしてあらはれたまふ御かたちをば、世親菩薩（天親）は「尽十方無碍光如来」となづけたてまつりたまへり。」

相対絶対の選択即無選択

行行相対して称名を選択。しかし、名号信心につけば絶対であって、称名に寄顕して相対をあらわす。

「為本」と「為先」

『和語灯録』巻五　24諸人伝説の詞20（(『聖典全書』六巻609頁）

恵心の先徳の『往生要集』の文をひらくに、「往生之業念仏為本」といひ、又恵心の『妙行業記』の文を見るに、「往生之業念仏為先」といへり。

先

草稿本　廬山寺本・往生院本（『聖典全書』底本）

最古の版本　延応元年版本

本

宗祖所覧本

32歳　1204（元久元年）

元久乙丑の歳、恩恕を蒙りて『選択』を書しき。同じき年の初夏中旬第四日に、「選択本願念仏集」の内題の字、ならびに「南無阿弥陀仏　往生之業念仏為本」と「釈綽空」の字と、空の真筆をもつて、これを書かしめたまひき。

87歳　1259（正元元年）　『選択集』延ゞ書きを書写（『聖典全書』三巻783頁）

新旧の異　　言は異なるが意は同じ

長西か？『選択集名対決』（『浄全』八、448）この註文に付いて、新旧の異なり有り。

先は最要　　本と同意

良忠『選択伝弘決疑鈔』（『浄全』七、190）

一、法然聖人の信心と念仏の関係性

・行行相対（諸行に対する称名【行中摂信】）

〔平成28年度　念仏為本　判決〕にしたがう

標宗の文において往生の業について念仏為本と示されているように、『選択集』全体の所顕は念仏往生である。信心も念仏も名号領受の相であるが、法然聖人は浄土宗独立という対外的意図から、本願の行たる念仏と非本願の行たる諸行とを行々相対して「往生之業　念仏為本」と標したのである。言うまでもなく、この念仏は行中摂信の念仏であり、また名号願力の活動相としての念仏である。

・信心と念仏の関係性（信疑決判の文や『黒谷聖人御灯録』等の文）

Q　信心と念仏の関係如何。

A　「三心章」の標章の文（『聖典全書』一巻1286頁）（『註釈版』七祖篇1231頁）

念仏の行者かならず三心を具足すべき文。

Q　この三心は何経の三心か？

A　『観経』至誠心　深心　回向発願心

Q　『大経』ではないですね。

A　『大経』『観経』の三心は同じと見ていい。

『観経釈』（『聖典全書』六巻366頁）

今此の経の三心は即ち本願の三心を開く。爾る故に「至心」者至誠心なり。「信楽」者深心、「欲生我国」とは回向発願心なり。

Q　「念仏の行者かならず三心を具足すべき」というが、念仏と信心の関係如何。

A　善導大師　就人立信・就行立信を受けて二種深信が引文される。信心は念仏能修の心。

Q　「三心章」最後の文「此の三心は総じて」を読め。

A

この三心は総じてこれをいへば、もろもろの行法に通ず。

（定散と組み合った三心）

「散善義」三心釈のおわり（『註釈版』七祖篇470頁）またこの三心はまた通じて定善の義を摂す、知るべし。

別してこれをいへば、往生の行にあり。

（称名正定業と組み合った三心）「同」願行すでに成じて、もし生ぜずは、この処あることなからん。

いま通を挙げて別を摂す。

諸行に通ずる三心を挙げて、しかも別して念仏の安心に摂める（所顕は念仏の三心にある）

Q　念仏行者が至誠心を具するとは？

A　真実心をもつ。内外ともに賢善精進であること。

Q　真実心をもった修行とはどんなものがあるか。

A　「散善義」では法蔵菩薩の修行を挙げている。

（『聖典全書』一巻761頁）（『註釈版』七祖篇455頁）

まさしくかの阿弥陀仏因中に菩薩の行を行じたまひし時、すなはち一念一刹那に至るまでも、三業の所修、みなこれ真実心のうちになしたまひ、おほよそ施為・趣求したまふところ、またみな真実なるによりてなり。

梯和上『法然教学の研究』259頁

しかし法蔵の如き真実心をもって二利行をなせというのは、凡夫の行者にとっては至難の要求であった。むしろ行者は、この経説に直面して真実の何たるかを知らしめられると同時に、自身の反真実性、煩悩性が顕わになり、痛切な懺悔が生ずるはずである。

Q　深心を具するとはどういうことか。

A　二種深信。決定心。称名必得生。信疑決判の内容。迷悟が別れる。

決定心。

（信機）一者決定深信自身現是罪悪生死凡夫曠劫已来常没常流転無有出離之縁（1288）

（就人）仏語は決定成就の了義（1290）の釈迦諸仏のすすめによって　　の凡夫が

（就行）如来が正定業と定めてくださった称名をして（1259）

（信法）二者決定深信彼阿弥陀仏四十八願摂受衆生無疑無慮乗彼願力定得往生（1288）

『西方指南抄』下本15上野大胡太郎實秀への御返事（『聖典全書』三巻995頁）

されば善導は、はるかに未來の行者のこのうたがひをのこさむ事をかゞみて、うたがひをのぞきて決定心をすゝめむがために、煩悩を具してつみをつくりて、善根すくなくさとりなからむ凡夫、一聲までの念佛、決定して往生すべきことわりを、こまかに釋してのたまへるなり。

Q　回向発願心は？

A　回向発願心の義、別の釈を俟つべからず。行者これを知るべし。

四修

『和語灯録』巻四　19禅勝房にしめす御詞（『聖典全書』六巻560頁）

信をば一念にむまるととり、行をば一形はげむべし。

一、宗祖の「念仏為本」の相承と、信心正因

「念仏為本」

〔平成一八年判決〕

対外的に聖道諸行に比対するときは、念仏諸善比校対論と、念仏往生の法門をかかげられている。

〔平成二八年判決〕

信心も念仏も名号領受の相である。念仏為本は名号の活動相として顕著な念仏において業因を語るものである。したがって教行証の三法組織となり、行と証とが直接して名号独用を示している。

「行文類」

出体釋（『聖典全書』二巻15頁）（『註釈版』141頁）

称名破満（『聖典全書』二巻19頁）（『註釈版』146頁）

念仏諸善比校対論（『聖典全書』二巻57頁）（『註釈版』199頁）

『選択集』引文（『聖典全書』二巻48頁）（『註釈版』187頁）

『尊号真像銘文』（『聖典全書』二巻640頁）（『註釈版』665頁）

往生の正因は念仏を本とす

正定の業因はすなわちこれ仏名をとなふる也（『聖典全書』二巻641頁）（『註釈版』666頁）

〔平成一八年判決〕『銘文』には「安養浄土の往生の正因は念仏を本とす」と仰せられているが、この文は『選択集』標宗の文を釈されたものであって、南無阿弥陀仏の標挙をかかげて法体名号にもとづく念仏一行を往生の因とされたものである。正因とあっても、衆生の能称の功徳を因とされたものでない。

『一念多念文意』　結文

浄土真宗のならひには、念仏往生と申すなり、まつたく一念往生・多念往生と申すことなし、これにてしらせたまふべし。

信心正因

〔平成二八年判決〕

信心正因は名号領受の極要である信心において正因を語るものである。したがって教行信証の四法組織となり、信と証とが直接して、往因決定は名号領受の時すなわち信一念であるという唯信正因を示している。信心正因と念仏為本とは矛盾するものではない。

以上。何かお気づきの点がありましたらお知らせ下さい。

〒五九九―八一二五
大阪府堺市東区西野５２１　旭照寺
山上正尊
senjakuhongan@gmail.com